

書籍目録に就きて

和田 萬吉

不肖今夕は御招きに與かりまして何か分相應のことを話すやうにといふ御命令であります。洵に御話
が下手であります上に題目が乾燥無味なことになつて居ります。で恐入りますけれども、それとて他に
何か面白い方面の御話といふものも有ちませぬので、已を得ず平生従事いたして居りまする書物のこと
に就きまして聊か御話を致しまして、多少の御参考になれば仕合せと存じて是より申述べることでは
あります。

私は唯今御紹介のありました通り年來圖書館の業務に携はつて居ります者で、此圖書館と申すものは
我國では遺憾ながら長い間輕んぜられて居つた形でございまして、昨今に於ても尙ほ其惰性を有つて居
りまして、殊に明治以來學校の設備は凡ゆる方面に向つて進んで居りますのに拘らず、圖書館なるもの
は教育機關として相當に大事なるものであるといふ處に着目されず片隅の方に押遣られて居つて、諸學校
の進歩發達とは齟齬を並べて居らぬといふ次第であります。是は始終吾々共の歎いて居ることでもあります

そこで折節は地方などに生まれて図書館の事業に就て一般公衆の方々に御話をするやうなこともござい
ますが、地方などに参りますと此図書館といふものは何の爲に設けらるべきものであるかといふこと
を問はれもしましてそれに對して答をする、又其前に當つて書物は何が故に役に立つものであるかとい
ふやうな御話もしなければならぬことがあるのでございます。是は實に苦しい話で私共のみならず此
御會の方々もさうでございませうが、日々書物を手にせず居られないやうな身分になつて居りますの
で今更書物は何が故に貴いものであるかといふやうなことを御話するといふことは、何か非常に餘所々々
しく又馬鹿々々しいやうな氣が致しまして、大變苦しいのでございます。丁度人間が食物を攝取するのは
生命を續け健康を保つ爲には必要であるといふことを説くが如きもので、知識階級の中に居ります者は
書物の有難味を知らずに居るといふことはないのでありまして、それを一々何か事細かに御話すること
はむづかしい、却て苦しさを感じる。然るに今夕の御會の如きは立派な知識階級の方々の御集りでござ
いまして、中には専門の學者研究家も澤山に御有りでありますからして、書物の効用などいふ卑近な
御話をする必要はなくして其点は大變樂でありますが、併ながら翻て考ますといふと、さういふ立派な方
々の前に於て趣味のある有益な御話といふやうなことはどういふことを申したらば宜からうといふ点に
考へ到りますといふと、亦頗るむづかしい事になるのでありまして、どういふ御話を致したら宜しから
うといふ点に二三日掛つて考へて居りました次第で、併ながら他に宜い思ひ付もございませぬので矢張

書籍目録に就きて一つの御話をして責を塞がうと存じます。

書目の御話と申しましたも苟も書目にかゝつたことを細大残らず申述べるといふことは容易ならぬことで、時間も掛りますことでもありますから、僅に其一斑に就て自分の聊か意見のあります所を御紹介して御参考に供したいと思ふのでございます。

そこで書目といふものはどういふものであるかと申しますと、是は申すまでもなく多数の書籍を系統的に集めて記載しているものが先づ書目でございますして、又書籍目録或は單に目録と是から申す積りでございます。此書目がどういふ役に立つかといふことを申しますと、既に一國の文化が餘程進みまして書物の製造産出が盛んになつた場合に、其書籍がどういふものであるか、何々であるか、又或學問、知識の方面にどんな書物が出て居るかといふやうなことを確かに知らうとするのも一つ、又書物の蒐集とか保存とか利用とか、さういふものを圖る圖書館とか文庫とかいふものが出來て居る時には、其内容をば公衆に示す爲にするのも一つ又公衆を相手に致しませんで一箇人が文庫を私有して居る場合にも自分々の心覺にするには矢張此目録がなくてはならぬのであります。其他書籍の在り處、置場等の關係上種々の用達をなすのであります、之を總括して申しますと畢竟書物を讀まうとする人と書物との中間に立ちまして此二つのもの、連絡をつける役をするものとなるのでございます。そこで如何程良い書物に致しましても讀手が無くては是は無用の長物でございませう、又讀者の方でも良い書物を與へて貰

はなければ無益の勉強をすることになるのでありませう、でありますから書物と讀者とを媒介する所の書目の大切なことは容易に分る道理であります。是に於て此書目に對して讃辭を呈した人が段々あるのでございますが、中でも殊に要領を得て居るのは支那清朝の學者王鳴盛といふ人の語です。此人は江蘇嘉定の産で字は鳳階、乾隆十九年進士及弟で、内閣學士といふ官に至りました所の當時第一派の經學者でありまして、隨分世間から尊敬を受けた者でありますが、著述には十七史商榷百尾及尚書後案が三十四卷あります。此人は西莊の號を以て詩に於ても名の有る人です。此學者の語に斯う申して居ります。「目錄の學は學中第一の緊要事、必ず之に従つて途を問はゞ方に能く其門を得て而入らむ」と申して居ります。此他に書目に就て色々面白いことを申して居る人がありますが、此王鳴盛ほどに力を入れて書目並に書目學を讚美した人はなからうと思ひます。ところが此言葉は決してお追徒を含んで居ると思はれませぬ。何の學問に志すに致しましても其道に入る所の案内、指針となる書目がなくては方角が分りませぬ。昔話にございますが、一行阿闍梨といふ知識が暗穴道といつて眞暗闇の道のある中に打込まれて、其處を旅して行つたやうなもので此阿闍梨は幸に佛陀の加護に依りまして曼陀羅が光明を出して行く先を照して呉れましたから衝當つたり轉んだりせず旅をすることを得ましたが、學問の事に志す人でも矢張曼陀羅の出す光明の如き書目の光明が無くては惑ふ譯であらうと思ひます。唯今申しました言葉の中に「之に従て途を問はゞ方に能く其門を得て而入らむ」といつたのは強ち門に入るばかり

る指したのではなくして、既に其門に這入つてから段々歩を進めて究極の所まで達するものと考へて宜からうと思ふのであります。ところが此書目といふものは書籍としては極めて見榮のしない素朴此上もないもので、何等人目を引付ける程の力を有たぬものでありますからして、用の無い人々には是程詰らない本はないのでございます。けれども其潤色もなく光彩も何もない所いが全く書目の生命とも申すべきものであります。恰も極質朴な口數の少い案内者の如きものであらうと思ふのであります。斯ういふ案内者は必ずしも旅人に追徒を申しませぬ。又無闇に語謔口かたけぐちを叩いて客を笑はせるといふことも出来ないか知れませぬが、大事な處に至りますれば必要な説明を爲します。又危険な所に至りますると其事を指示して安きに着かしむる手段を採つて呉れますのであります。書目の良いものも矢張それと同じやうに其記す所は甚だ簡單ではありますけれども、記した事柄は皆確實で讀者を誤らぬやうに致します。纂の規則とか凡例と隨て書目を作ることは此道の經驗の無い人の思ふやうに容易ではないのです。殊に其編かひふものを一定するには頗る注意を要すること非常に慎重周匝の考慮をしなければならぬのでございます。

それに就きまして挿話がございますのを一つ申しますが、皆さん御承知の圖書館の數ある中で最もえらい圖書館としてあるのは英國倫敦に在る大英博物館（ブリチツシミュゼアム）の文庫でございます。あの大英博物館文庫の中興、或は寧ろ開祖といつても宜からうと思ひますが、何しろ大分前から存立して

居りましたけれども、久しい間ひどい形になつて居りましたのを興した人、其中興の祖、サー、アントニー、パニージーといふわらい人がございます。是は伊太利の亡命者で、本來過激の政論家でございます。到頭伊太利に居れなくなりまして、倫敦に逃げて行つて英吉利の人になつて大層方面の變つた方に働き出しまして、さうして段々出世して英國博物館文庫の長となりました。此人は智力といひ、膽力といひ、才氣といひ、どの点からいつても圖書館界に並びない人であります。此圖書館などの仕事に膽氣とが、才氣とかいふものは要りさうもないやうであります。決してさうで無い。其智力、膽氣、才氣等の点に於て此人は圖書館界のナポレオンといふ綽號を取つた傑物であります。其管して居りました今の博物館の文庫、其文庫に於て始めて目録の編纂規則を制定いたしました時に、是は長い間掛つて出来ましたのであります。其間に此パニージーの出遭つた凡ゆる難儀の有様を友人に語りまして云ふには、規則の一箇條々々に頻々として起つた細かい議論は姑く置いて、自分が全體に就て此目録規則を作り上げるのに感じた困難といふものは非常である、それを他人に御話して其人々の同情を求めやうといふことすら困難であつて、到底他人には分らないことであると、斯う申して平生に似合はない愚痴を零されたといふことであります。其時大抵の人は之を聽いて餘り感動も致しませぬやうでござりましたが、唯一人爰に倫敦大學の教授で當時屈指の數學者でありましたオーガスタス、ド、モルガンといふ人がありまして、此人は數學の大家であるのみならず文獻の學にも相當の趣味があつた人でありまして、此人がパニジ

この苦心を察して申すには、書籍を確實に記載することは最もむづかしい事業の一つであることを自分は堅く信じて疑はないと申して、パニジャーに多大の同情を寄せたといふことであります。それで此パニジャーの制定いたしました目録編纂規則は可なり立派なものでございますが、其以後に尙ほ講究に講究を重ね段々込入つて參たのでございます、が今日に至りましてもまた未決の問題がある位でございます其間に甲の目録學者と乙の目録學者と又丙と丁といふやうに互に一致しない所がございます、論戦に火花を散らしたことが屢々あるのでございます。是に於て吾々の仲間に於ては規則の戦闘バトル、オブ、ルールズと斯う申して一種の熟語が出来て居る位でございます。

近年に至りまして此目録の事業は國際的の色を有つことになりました。それは米國の圖書館協會——圖書館に關する種々の研究を致して居ります大きな學會でございますが——それと一方は英國の圖書館協會、此兩方の會が双方から調査委員を出し合ひまして、色々協議を致しました結果、爰に萬國目録編纂規則と申しても宜いやうなものが出来上りましたが、其中の幾條かは英米の各委員の間に協調を見ることがむづかしくございまして、到頭御互の各自の主張の儘で當分保留するといふことになつて居ります。斯ういふ困難なことが目録規則のやうな一寸見ては何の造作ないやうな事業に蟠らうとは門外の人思寄らぬことであらうと思ひます。是は目録の業が決して易々たるものでなくして意外に講究を要するもので、隨て相當の學問識見を有つて居り併せて經驗もあり練習を積んだ人々の手に成るべきもので

あることを証明して居ると思ふのであります。目録にして果して立派な學者の手に成つたものもありませんれば、それは必ずや一般の學者の指南嚮導たるを失はぬ筈で、目録編纂家は是等の學者や研究家から多大の尊敬を拂はれることであると思ふのであります。大抵の著述編纂ものはそれを讀む一般の公衆からそれが大變に宜ければ相當の御禮の言葉を受けるのでございますが、目録といふやうな本になりましては是は一般の俗受は悪うございます。併ながら其一般民衆を開導して行く所の位置に居る學者には調法がられるのであります、即ち目録の地位は尋常の書物に比して遙に一頭地を抜いて居る形であります。であるから良好なる目録を作ることは寧ろ餘程高尚な事業でありまして、決して卑むべき業ではないのであります。

それで昔から世界に於ける目録事業の有様といふものはどんなものであるかと思つて、お隣の支那は是は流石に崇文好學の國でありますから歷朝の學者の中には心を目録に用ゐた人が少くないのであります。最も早いのは西歴紀元三四十一年の頃から漢の世、劉向といふ學者―是は烈女傳、說苑などを作つて名高い人でありますが此人が七畧別録といふものを二十卷作り、其子の劉歆といふ者が七畧別録でなく本當の七畧を作りました。是は父の志を繼いで其業を成したのであります。其後宋の王儉の七志の目録などは何れも隋唐より前に立派に出來て居るのであります。併ながら不幸にして中途亂世が度々ございまして、是等は今日には完全な形では傳はつては居りませぬ。兎に角出來たといふことは明かに

歴史に出て居ります。其他書目として歴然として今日に傳はつて居る所のもものが幾らもございます。それは漢書の藝文志であるとか隋書の經籍志、舊唐書の經籍志、唐書の經籍必、宋書の藝文志、元書の藝文志、下りて明書の藝文志といふやうな堂々たるものがございます。此等の前漢書なり隋書なり唐書なり宋書なりはいづれも勅選の歴史でありまして、本紀列傳とあつて其他に志類が附いて居りますが、其志類の一を成して居るのが藝文志や經籍志です。かやうに志類として立派に傳へられて居りますことは詰り目錄を大に尊重して居る用意の表現と見るべきものであります。歴史編纂の上から申しまして用意の行届いて居ることを稱へずには措けぬのであります。是等の目錄編纂の責任者は誰であるかと申しますれば、前漢書の藝文志に於ては矢張前漢書の撰者である所後漢の大史家班固であります。後漢の藝文志に於ては唐の長孫無忌等であります。舊唐書藝文志に於ては舊唐書の撰者たる宋の劉昫、唐書藝文志に於ては有名な歐陽修、宋書藝文志に於ては元の脱々といふ人々が立派に署名して居るのであります。それを見ても書籍目錄の本質を少しも輕じて居らないことは明瞭であります。是等の書目は朝廷の公撰に屬するもので公の著述でございますが、其他に隋なり唐なり宋元明各朝の學者共の私の撰述に係る所の目錄は頗る多いのでございます。降つて一番近い清朝になりましたは考證典據の學問が大變に開けて居りますので、目錄の學も一層重要なものとなりまして、知名の學者で此ものに手を著けた人は數ふるに暇ない程でございます。抑々書目といふものが何が故に勅撰の歴史の一部分となるのであるかと申し

ますと、是は言ふまでもなく、歴朝に於ける文献の存在又は脱漏を詳かに致し、之に由つて學問藝術の源流傳流を考へ、世風思潮の趨き向ふ所を徴するのに便する爲であります。書物といふものは西洋の人も申して居る通り時代々々の思想の結晶と視るべきものでありますからして、此書籍を系統的に記載した書目といふものは其國の文化史の一部をなすものとも申されるのでございます。要するに支那に書目上の著述が多く又書目の學が發達して居るといふことは、支那の文化の變遷別しては學風とか思潮とかいふものゝ移り變つて行く所を手取早く知るのに、これ程便利であるかといふことは、私より諸君に於て夙に御承知のことであらうと存じます。

支那の有様は此位の所に止めまして西洋の方はどうかと申しますと、歐米では書物を澤山に集めまして圖書館と名づけ、此圖書館と稱するものを數多く有つて居ることは東洋よりは早いのでございます、でありますから定めて書目に對する注意も古い時代から深かつたらうと想像されるのでございますけれども、事實に於ては之に反するやうであります。成程圖書館の創設は古いには相違ありませんけれども其圖書館をば系統的に記載した目録といふものは比較的少く、五百年以上の圖書館の藏書目録で今日に傳はつて居るものは一つもございませぬ。大抵は古い圖書館の其建物と共に跡を滅して形も無いものになつたやうであります。有名なアレキサンドリヤ圖書館には目録があつたといふことで、其分類なども物に記してありますが確かな様子は分りませぬ。降つて中世紀に至つても圖書館はあるのでございますが

大抵は寺に屬して居ります。それが到る處歐洲の各地にございましたのですが。其目録にどんなものが存在して居つたか一向に分らぬのでございます。大方確とした目録様のものは無かつたのでありませうと思ひます。要するに目録の學問は近世になりまして圖書館が世の新機運に動かされて。其本當の使命を見出されるまでは閑却されて居たと申して誤りはないやうです。さうして圖書館が從來久しく王様やお大名方の専有物でありましたり。又は僧侶達の私有物でありましたり。乃至は極めて少數の者の利用に供せられるに過ぎなかつた時代、それを脱しまして一般民衆の爲に學問を習ふ所又は修養する機關といふことを認められる時代になつてから、始めて其圖書館の目録の編輯も次第に講究され始めたのであります。それは今から漸く五十年前位のことでありまして、比較的新しいことでございます。併しそれ以來の進歩發達は隆々として著しいものでありまして、凡そ目録に關する細大の事柄は研究に研究を重ね論議に論議を積みまして殆ど餘蘊のない程になつて居ります。目録に最も多く注意を拂つた國は北米合衆國であります。それは圖書館そのもの、發達が歐羅巴の各國よりも遙にわかつた故でございます。尤も圖書館の進歩は目録の効力如何にも依ることでありまして。途中から見ますと圖書館のわらくなつたのが原因で目録の改良は結果であるか、又は目録が宜くなつたので圖書館の効用が宜くなつたのか、何方が前件で何方が後件であるか、後先が分らぬといふことがあるのであります。要するに圖書の學と目録の學と兩々轡を並べて居ると見れば誤はないのであります。米國は左様な状況にあるので

あります。それで米國あたりで目録がどんな風に進んで居るかといふことを一言致さなければならぬのでございます。それは目録の編纂規則が整然として備つて居るのは申すまでもない。其上に目録の形式が積年研究の結果として頗る要領を得て居るのでございます。從來歐米各國に長い間流行して居た目録は著名の名から書物を引出す所謂著者目録の形式を取るか。又は書名から引出す書名目録の形を取るか。又は書物の内容となつて居る事柄物柄の名から引出すか、又は書物を其部類別けにした其分類の下に書物を檢出するか。色々ありましても各々一本筋でございます。隨つて一種の目録の効用は他の三種の目録の効用を併せ得ることは出来ない。何の目録に致しましても其用途には限りのあつた譯でありまして、例へば如何に行届いた著者目録が爰にあると致しまして。其著者目録を明けて書名から書物を引出さうとしてもそれは出ないのであります。ところが書物を檢索する人は誰も彼も皆著者の名を知つて居る譯ではございませぬ。又何時でも其書名を知つて引きに掛るには限らぬので、唯或は著者名を知つて居ることもあり或は書名を知つて居ることもあり、乃至は事柄物柄に依つて引出さうとする、或は分類に依つて引出さうとする、つまり場合々々に依つて目録の用ゐ方を異にするのであります。でありますから若し爰に唯一の目録がございまして、それが著者名からも引ける、書名からも引ける、事件物件、事柄物柄の名からも引ける、分類の名からも引けるやうに出來て居りましたならば、此上調法のことはないので是に至つて都合の宜いものでございます。米國の目録學者は深く是に注意を致しまして段々注文に應

するやうな目録を按出致しました。即ち著者名、書名、件名―是は事柄物柄を申しますしそれから分類、此四つのものを一部の中に收め込んだもので、何人にてしも其欲する所の書物を引出すことは丁度辭引に就きまして言葉を引出すのと同様の組織にしたものが出来たのであります。其引き方から致して此目録の名稱をヂクシヨナリーキャタログと申します。今日では是が一番理想に近いものとして米國では専ら流行して居ります。歐羅巴の國々でも追々之を學ぼうとして居る次第であります。今後は圖書館の藏書目録は申すに及ばず一國の出版の總目録其他諸種の目録も此辭書体の形式を取つたものが次第に多くならねばならぬと信じます。目録が斯様に改良されて書物を檢出することが自由自在極めて手早く出来ることになりまして、一國民の讀書の能力を増すことになりまして、是は非常に大切なことであらうと思ひます。現に米國の多數の圖書館には此辭書体目録が備付けてありますが、大抵はカード目録に仕立てありますので、其實況を知るにはどうしても彼の地に行つて見なければ分り悪いかも知れませぬ、併し米國內の出版書籍を網羅して居りますアメリカン・キャタログといふ目録或はユー・エス・キャタログといふ大きな目録がございますが、其類は印刷されて廣く内外に及んで居りますから、其等を御覽になれば直ぐに了解が出来るのでございます。歐羅巴の方でも段々此目録を喜ぶやうになりました。既に来つゝある傾でございます。

以上は西洋の方の目録の御話でございますが。今度立復りまして我國の目録界の状況を大觀致します

と、昔から今まで通じてそれは洵に淋しいことでございます。最も不思議の感に堪へないのは支那との交通があれ程早くから開けて居りまして、支那の學問藝術といふものが滔々の勢ひを以て我國に傳來して居るに拘らず獨り目録の書は常に國人の顧みる所ならず此長い年代の間に支那の目録に學んで較々目著らしいものを作つた例は平安朝に於て只一つあるのみである。それは藤原佐世と云ふ人が作りました日本國見在書目録と申すものです。此外には先づ無いと申しても宜敷のであります。此佐世といふ人の目録は宇多天皇の勅命で出来ましたのであります。寛平の三年から六年位の間奥州貶謫中勅が下りまして其地で作つたといふことになつて居りますが、寛平中の編述でございますから大分古いものであります。其体裁はどんなものかと申しますと、全く隋書經籍志に依て居るのであります。そのみならず此目録の目的までが矢張隋書の經籍志などと同じやうに或時代に存在して居る書物を出来るだけ網羅的に記載したのでございます。即ち此見在書目録は編述當時日本に行はれて居りました支那の書物を網羅したのでございますが、後世の人々は是に依て平安朝の頃には漢學がどういふ風に我國に流行して居つたか、又我國の漢學が明法道、明經道、紀傳道其他曆算陰陽道といったやうなものに分れて其各々の道々で宗と致した書物は大凡どんなものであるかといふやうなことが文明に分る大切な文教史の資料と申して宜いと思ひます。殊に此目録が支那研究の上に役に立つことは漢籍の中で早くに本元の支那では滅びてしまひ、前申した隋書の經籍志のやうな立派な目録に漏れて居る本が幸うじて日本に傳はつて其命脈

を續けて居るといふ事實が此目録に依つて知れるのであります。支那はあの通り度々の革命がございまして。其間に兵燹の爲に失つた本、劫略せられて何處へ持つて行かれたやら分らぬ本が澤山あるのであります。廣い國のことでありますから一部や二部は何處かに遺つて居て追々は出て參るのもありますが如何にしても出て來ない本がまだあります。其物が其變亂より以前に偶然或は何かの折を得て日本に渡つたのであります。さうしてそれが日本に於て後の世までも傳はつて居るといふやうなことが此佐世の見在書目録に依つて分るのであります。それで支那の清朝に至りまして此古い平安朝時代の見在書目録を見た學者等が非常に喜び且つ驚きまして、此目録によつて段々と古く日本には遺つて自分の國では早く滅びてしまつた書物類を探り出して、之を原本通り影刻するなどといふ事になりました。古佚叢書と稱するものはさういふ本を集めたものであります。見在書目録は斯様に日本の學者ばかりでなく支那の學者に對しても利益を興へるものであります。其本を見ますと何等の奇もないのであります。別段に記し方が巧みであるといふやうなことは寸毫もなく、唯だ有りの儘を正直に記録したままであります。正直に少しも私の意匠を交へないで記した本で、千年二千年の後に至つても大切な參考になることは他に幾らも例があることであります。此見在書目録も確かに其一つであります。斯うした佐世の見在書目録のやうなものが若し此他に十部なり二十部なり出來て居りましたならば、殊に支那人の作つた本ばかりでなく日本人の作つた書物に就て斯ういふ目録が出來て居りましたならば、それこそ日本

の文献史に立派な材料を寄與したことでありませうが、残念なことには此見在書目録に次いで興るべきものが一向に無いのであります。若し強ひてありと致しますれば源平時代になりまして是は歴史上に有名な藤原通憲―信西といふ人で平治の亂に大立物になつて居る人―あの通憲入道、あれは當時有数の學者でありまして、和漢の才物でありますが、この人が本が好きで澤山の書物を集めて居りまして、其書目が遺つて居ります。通憲入道藏書目録と題してありますが、是は丁度源平時代の現在書目録に當ります。又稍降つては所謂南北朝時代の現在書目録に當りますものは文和三年―北朝の年號であります―の仙洞御文書目録であります。此二つは餘程價値の劣つたものでありまして、体裁なども甚だ整つて居らず、逆も佐世の見在書目録の如くには參らぬのであります。それに致しましても古い書物の傳來を調べるには多少役に立つことを考へます。若し通憲入道の藏書目録や仙洞御文書目録より優良なるものであつたならば、嘸かと思ふのであります、それも日本は書物の乏しい國でもあつたならば致方がないのであります。昔から書物は豫想外に豊富でありまして、まだ印刷術が起りませぬ時代から内外の書物を澤山に集めて大きな藏を有つて居りました人もあります。諸君の中に。御承知の方もあり又御承知でない方もございませう、御承知でない方は定めて一種驚を御感じになることゝ思ひますが、唯今より丁度千六百七十年前、奈良の朝に既に一箇人で自分の藏書を公開致しまして學問好きの書生等には自由に閲覽させた篤志者もございまして、其文庫の名を芝亭と申しました、此庫の主は何人かご大納言石上宅嗣卿

であります。此事實は明かに續日本紀に出て居ります。宅嗣卿は取りも直さず日本に於ける公開圖書館の開祖と仰がるゝ人であります。此時分から書物を數千乃至一萬二萬と集めて居つた人が恐らくは宅嗣の外にも澤山あつたらうと思ひます。例へば吉備眞備、弘法大師の如きで、いづれも入唐の土産に澤山の書物を將來して。眞吉備の如きは數千卷を持つて來たといふことであります。さういふ人は自宅に立派な文庫を有つて居たに相違ないのですが、併し公開といふことは恐らくは石上宅嗣卿に始ることであらうと思ひます。奈良朝時代から平安時代に掛けますと、大分學校が出来て參りました。それは所謂私學でありまして公開ではありませぬが、兎に角立派な學校が出来て居る。例へば弘文院、是は和氣廣世、即ち清麿公の子息の作りました弘文院、此處に立派な文庫があつた事は日本後紀に出て居ります。それから紅梅院といふ菅公の文庫、稍々下りまして千種文庫を有つて居た大江匡房卿であるとか、或は山城國の南部日野の別業の文庫を有つて居つた日野資業であるとか、また京都の高倉の所にございました文庫の主なる藤原頼長―是は歴史上有名な悪左府頼長といふ人ではありますが、此人が非常な學問好きで書物を宋國から取寄せて盛にそれを讀んだ人であります―斯ういふ名家が書物蒐集家としても名高いのであります、就中大江匡房卿などは數萬卷を藏して居たといふことです。其文庫は仁平三年四月十五日の大火事に悉皆焼けてしまつた。それを傷んで居る詞が藤原頼長の宇槐記といふ記録に出て居りますが、これで各時代に隨分立派な文庫の在つたことが判ります。此等の文庫には篤志の學生知合の人には

閲覽を許したのもございませう。此外に亦學校とか寺などに附屬して半公開の姿をなした文庫が稍多くあつたやうに察せられますところが其目録になりますと、一つも後世に傳つて居りませぬが、恐らくは目録らしい目録は作られずにあつたのだらうと想像されるのであります。若しありましたならば何とかして傳はりそうなものであるのは、前に申しました寛平時代の見在書目録が傳はつて居るのを見てさう考えられるのであります、それから信西の藏書目録の如きも實際出來て居たればこそ、其文庫竝に其人は平治の亂に滅びたに拘らず。目録だけは後世にまで歴然と遺つて居るのであります。無いものが遺る道理がない、あればこそ斯ういふやうに遺つて居るのであります。要するに昔の人は餘程淡泊であつたと見えて書目を作つて置かうといふ念慮が一向に乏しかつたものと思はれる、又廻りの人達も一体に書目に對して希望要求をする者が無かつたものと見られます。今更そんなことを申しても仕方がないことではありませんけれども、兎に角殘念に存するのであります。

それから下りまして鎌倉時代になりますと有名な金澤文庫であるとか、又室町時代には足利學校の文庫などいふ立派な圖書館が出來て參りました、又箇人の藏書家としては一條兼良の如き數萬卷を有つて居りました人もありましたのですが、其等の文庫にも目録沙汰はほとんど聞かないのであります。尤も金澤文庫や足利學校の藏書の一部をば記載したものが後世に至つて作られて居りますけれども、謂はゞ雨風に曝された骨々を拾ひ集めた形のもので血や肉やを失つて居りますからして文庫の全盛の當時を其

儘見るには足らないのであります。唯だ一つ此頃の産物として珍しいのは永享年中、即ち紀元二千九十五年前後足利義教將軍の時代に清原業忠といふ儒者が作りました本朝書籍目録といふものがございませう。此目録は日本で出来ました書物を集めて一覽に便じたものでございませう。前の佐世の見在書目録の支那の本ばかりを集めたのとは違つて、國書ばかりを集めたもの、是は類別も整つて居りますし、其他種々の点に於て宜い。網羅的の目録ではございませぬけれども、撰擇的のものとしては要領を得て居るものでございませう。此目録に依て吾々が受ける利益はどんなものであるかと申しますと、是は前申した通り紀元二千零九十五年頃のものでありますから、今日から僅か五百年足らず前に出来たもので比較的新しいものです。其新しいものであるにも拘らず其收めて居る書物の中には今日全く傳らないものがあります又ありまして今日は零卷斷片、完全ではないものが随分此目録に完全に記載されて居るのでございませう。是は其後二三十年経ちますと、例の應仁の大亂がございまして、あの太亂の時に洛中洛外が兵燹に罹りました。又兵士や盗人どもの劫略に遭ひまして寺神社繙家などの寶物といふ寶物、書物記録の類に至るまで随分滅びてしまつたものが少くないのです。多分永享頃までは大抵揃つてあつたのでせうが、其後此兵燹に罹つて無くなつたものといふ斷定がつくのでございませう。本朝書籍目録があるからと申して、應仁の亂で無くなつた書物が何處からか出て來るといふ譯ではございませぬ。

此が目録に依つて或書物が何時頃まで完全に存在して居つたかといふことを知るのも頗る面白い又有益

なことでもありまして、色々の考證の基になるのでございます。それでありまして完全な書目が各時代に亘つて、此時代にも此時代にもといふ風に數々の時代に出來て居て、此時代迄は斯ういふ書物があつたといふ事實を明に知り得る手段がありましたならば、是は結構なことであるのでございます。前に申しました支那歷朝の經籍志、藝文志といふものが藝術研究の資料となるのも全く此處にあるのでございます。日本には此經籍志などに相當する書目は漢籍に就きましたは度々申します所の佐世の日本國見在書目録がどうやら似たもので、併しまだ遠いものであります。それから日本の書物に就ての目録は唯今後に申しました永亨の本朝書籍目録であります。永亨の目録は見書目録と同價値とは申されませぬ、併し無いよりは遙かに宜しい。要するに今日では日本國見在書目録と、本朝書籍目録が辛じて出來て居り又傳つて居るのを幸とせねばなりません。

以上は室町時代までの御話、それから更に下りまして江戸時代になつてはどうかといひますと、此時代は御承知の通り家康の活眼で文教を興されました。學問の流行が空前でありました。書物の用は昔は學者先生方に極つて居たのですが、此時から一般庶民も書物を見ることが出来ることになりました。此に於て民衆の要求に應じて書物の取捨選擇といふやうなことを指南致します、學者も現れましたが、其先驅者は誰であるかと申すと、徳川幕府文教の樞機を握つて居りました林道春、羅山先生であります。處が年月が進むにつれて江戸時代の儒者は兎角自ら高く標榜したがる傾向を生じて、道春の如き通俗むき

の學問の仕方を取つて行くことをいさぎよしとしなかつたのであります。隨て書目の如きは、之を顧みませぬ。書物などは本屋であるとか或は町の儒者、或は市井に居る人で文字のある人、さういふ人に譲つて苟も儒者と名のつく人はそんなものに目を着けなかつたといふ風があります。是等の儒者先生は支那を崇拜して居りながら、經籍志藝文志などの偉大なる事業であることを忘れて居つたのであります。是も清朝乾隆の進士であつた金榜といふ學者が漢書藝文志に通せずんば以て天下の書を讀むべからずといふ大見識を發表して居る、さういふ見識を日本の儒者は有たなかつたのであります。仲々他人の爲に書物を選択してやるどころではございませぬ、自分に於て讀書の方針に迷つて居た傾があります。幸ひなことは此江戸時代には書物屋坊間の文字ある人の中に通俗向の著述をする人が出て參りましたので江戸時代以前には曾て無かつた内國の刊行本目錄を作り出しました。それを始めとして書物の事を記した色々の本が現れるやうになりました。中には一々の書物の説明をした所謂解題書といふものが此時に於て始りました。併しながら書目を以て萬の學問の基礎としなければならぬといふことを明かに見破りました。此の學問に心を専らにする學者の出て參りましたのは餘程遅いことでありました。先づ天明寛政の頃から漸く起つて居ります。即ち吉田篁墩といふ學者、あれが先づ書物の研究家の過渡時代の開祖になりませう。それから狩谷掖齋とか、近藤正齋——重藏守重のことでございます——是などの事業が先づそれです。唯だ惜いことには吉田篁墩にしても掖齋正齋兩先生にしても其研究の主眼は支那の書物にありました。

から、何でも漢文で書いた物を本として、國文で書いた本には餘り及ばなかつたのであります。即ち悪く申せば外國に親しんで内を疎かにした誹がございます。是は清朝の學者が段々書目學に關した著述を致して居りますので、それを見様見真似に其跡を辿り過ぎたやうな姿がございます。又履み誤つた形もありませんと思ひます。獨り爰に尾崎雅嘉といふ書物屋でさうして國學者である人が一見識ある篤志家でありまして、御承知の群書一覽といふ書物を作りました。是は日本人が作つた書物の主なるものゝ解題であります。それから江戸時代を通じまして本當の公開ではございませぬが、半公開の圖書館或は全く公開しない圖書館も段々出來ましたので、其藏書目録も段々現れるやうになりました。簡人の藏書目録も少からず此間に作られて居ります。併し是等の書物を編纂するに方つては銘々の手加減に任せ形式も區々になつて居ります。編纂の法も一定いたしませぬ。中には甚しいのは一向規則凡例を定めずに出任せに作つたものも少くないのであります。實際今日の歐米の圖書館の目録に引合せて見ますと、如何なる田舎の圖書館に行つたならば斯んな書目があらうか、どんな山間僻邑でも斯んなものはなからうと思ふやうな至つて幼稚なもので、申さば八百屋とか肴屋とかの通帳と餘り違はぬ位のものであります。獨り紅葉山文庫、是は幕府の官文庫です、又幕府の官學であります昌平黌、此處らの藏書を録したものは流石に官府の仕事でありまして、相應に眞面目で整つた形式を示して居ります。併ながら其編纂に當りまして立てた凡例が随分誤つた見解を含んだり又精細を缺いて居ります爲に尙ほ不完全の誹を免れない

のであります。要するに書目の學問は同じ時代の外々の學術に較べますと非常に劣つたものになります。是は畢竟目錄の學が一向に専門に立てられず、剩へひどく輕蔑されて居りましたので、立派な學者達が此方面に走らなかつた爲でありませうと思ひます。幕府の御書物奉行は此紅葉山文庫に關係を有つ人であり、當時に於ては書物を取扱つて目錄などを作る一番高い地位の役人でありましたが、其歴代は十數人あつても、其中で仕事らしい事績を遺したのは僅に青木昆陽先生即ち甘藷先生として名高い青木文藏、或は近藤正齋即ち重藏守重、又林家の一族で林復齋といふ人、此三人か四人位で、他の十人餘りの人は何をして居たか一向判らぬのであります。先づ斯んな有様で江戸時代二百五十年は過ぎました。それから明治時代に這入りますが、此明治時代に這入りまして目錄の學は大に發達しなければならぬ。機運に向つて居るのであります。それは何故かと申しますと公開の圖書館が追々世間に設けられまして、學校の教育を補助したり擴充したり完成したりする機關は圖書館であるぞといふことが認められるやうになりましたので、其圖書館の効用、能率に至つて大なる關係を有する藏書目錄といふものが大いに整へられねばならぬからです。理屈はさうであります。ところがどういふものでありますか、此圖書館の進歩が非常に遅々たるもので、明治時代の四十五年の間に圖書館らしい圖書館の出來たのは僅に三十か三十四五位でございませう。尤も全國を通じては大凡七八百はあるのですけれども、其大部分は名ばかりのものでございませう。經費も至つて少い藏書も少い、之を取扱ふ所の役人に至つては全然其人を

缺いて居るのです。随て斯ういふ貧弱なる圖書館の目録の如きは固より物になつて居りませぬ。目録を作る人が置いてないのですから、目録の作れる道理がないのであります。

それから大正の御代になりまして御大典紀念といふ名で大分圖書館が諸方に出来ましたが、それを加へまするといふと數の上では日本中に千二三百唯今あることになつて居ります。例へば文部省の報告などに依りますとさういふことになつて居りまして、それに誕はないのですが、それでも大勢は矢張依然たるものでございまして、世界の圖書館の統計といふものの上で耻しくない程のものは前申す通りの少數に止つて居ります。これが今日唯今までの日本の圖書館の狀勢でございまして。それで世界の圖書館は大凡どの位あるかといふ質問がございませうが、それは大積りに致して五萬位でありませう、其中に我國の一千二百を悉く加へて宜いものであるかどうか問題ものであります。恐らく千二百を五十か六十位に減しても決して甚しい遠慮ではなからうと思ひます。我國の圖書館が斯の如く不活潑なるは種々の原因から來て居りませうが、それを精しく申しますのは今晚の趣意でありませぬ。要するに斯の如き貧弱な圖書館に立派な目録があるかどうかといふことは明かでありませぬ。ところで幾分優良である所の圖書館、世界の圖書館の御仲間入をしてもどうやら宜しからうといふ四五十の圖書館に皆目録が十分に出來て居るかご申しますと、是がどうも十分とは申せぬのでございませぬ。米國あたりの圖書館などに較べますと餘程遜色がある。稍々宜しい圖書館の目録が不十分である理由は第一目録が大切であるといふ

こと並に目録を編纂するには案外手数が掛るといふことに就て一般世人が十分の了解を有たず隨て是に對して金も人も必要なだけと與へないといふやうなことが先づ主なる原因でございませうが、今一つ更に大事な理由は目録編纂者として適任である人を得兼ねて居ることでありませう。仮令爰に相當資力のある圖書館がありまして金とか人手であるとかいふことには窮屈を感じさせないに致しましても、目録の學問を修めた人間が其圖書館に来るといふことが餘程むづかしいのであります。又さういふ人間が實際に事に當るのでなくては即ち素人が自分々々の考にやつて居るのでは、到底優良な目録を作ることは出來ないのであります。圖書館の事業に世界中で一番力を傾けてゐるのが亞米利加で、申さば圖書館界での一等國でございませう。此米國では早くから圖書館の學問をば一箇の専門學と認めて居りまして、此の専門學を教へこむ所の特別の學校を建て、今や規模の大きいものが十五六もございませう、其程度の高いものは大學若は第一流の専門學校、其處を卒業した者といふことを入學の資格と致ますので、さうして在學期間は何年かと申しますと先づ二箇年でございませう。此圖書館學校の修業科目は圖書館の管理に必要な物ばかりで、稀には外國語などを補習的に教へて居る處がございませうが、それはほんの餘暇にやることで、正科は何處までも圖書館の管理法であります。其中でも目録の編纂法は最も重要なものとして扱はれて居ります。斯ういふやうに米國では資本を入れまして仕込んだ人が其々實務に就きましてさうして圖書館の目録をも作つて行く次第でありますから、其結果の宜しいのは當然なことでありませう。それで

此圖書館學校で目録の學問をどういふ風に教へて居るかといふことは申して見たいのでありますが、餘り岐路に這入りますし、もう時間もございませぬので省きます、兎に角大學の業を了へて一人前になつて居る人に二箇年に亘つて教へるだけの仕事が目録編纂の準備知識として要るといふことを御記憶になれば宜しいです日本には圖書館學校はまだ一つもございませぬ。それから外國には圖書館で使ふ人を徒弟的に教へこむといふ制度もあります。さういふ制度も日本には立つて居りませぬので、當分の處は良い目録を作つて圖書館の効力を大に發揮し得る有資格者を求め難いやうに思ふのであります。でありますけれども今日では外國の目録で模範になるやうなもので容易に得られますし、又前申した目録編纂規則の極精細なものも出版になつて居るので、志だにあるならば勉強次第で目録學者になることが出來ませう、唯志を立てることが至つてむづかしいのでございます。どういふものか我國の人は總ての學問、總ての藝術の基礎となる其道々の文獻の研究をしようといふことをしない、殆どそれをしないのは癖のやうになつて居ります、それで古い處では支那の經籍志藝文志のやうなものも殆ど無いのでありますし、近い所では歐米に行はれて居るやうな進歩した目録もなしに平然と澄して居るのであります。斯ういふ態度で學者研究家も往生して居るといふことは甚だ學術の發達を鈍らせて居るのではありますまいか。此場合に具眼の人が目録の學に意を傾けて下さいます、目録の編纂に手を著けて下さるといふことは、學者として公に奉ずる所以の一つであらうと思ふのであります。尙ほ申漏しましたが、西洋諸國に於け

る良い目録といふものは圖書館の藏書目録として現れて居るばかりではありませぬ。一國內の出版書目なり又或一つの學科のビブリオグラフィといふ物も澤山に出て居ります併し本源を申すと圖書館が進歩して居りまして其圖書館から良い書目を出しますから、別して圖書館の目録に重きを置いて御話した次第であります。自分は職務上朝な夕な目録に親んで居らなければならぬ人間であります。外國の目録を見る度に染々と感じますことは例へば分類目録のやうなものを手にする場合には、この部類の處を開きましても其一番初めのページに必ず書目といふ一つの細目がありまして、さうして其當該學科に關する所の書目が悉皆出て来る。其次には同じ學科の辭書類、其次には其歴史類とか、斯ういふ順に出來て居りますが、此順序は即ち外國の學者が學術を研究する態度を其儘に現はしたものと思ふのであります。第一に一つの學科の書目を調べて掛ることが判然と判るのであります。斯くの如く致してこそ研究の方針が立ちますし研究の順序が着いて行くことになりませう。ところが日本には仮令立派な分類目録を作りましても各學科の一番初めに置くやうな書目類などは殆ど無いといふ次第で、洵に齒痒く存する次第であります。此ビブリオグラフィの一部分をば學科々に就て見出すことが出來ないのは、ほんやりと考へて居れば更に痛痒を感じないやうであります。其實は頗る重大な關係があることであります。清朝の王鳴盛の所謂「之に従て途を問はゞ方に能く其門を得て而して入らむ」といふ譯に參らず、學問の指針が殆ど立たぬであらうと思ひますので、今後は目録の學問を盛んに致したいと冀ふのであります。洵に下

手の長談議で甚だ失禮、或は後席に御講話をなさいます下村博士に對して貴重の時間を浸しましたか知れませぬので、御詫を致して置きます。

平田篤胤

なすことを己が力と人や思ふ

神のみちびく身を知らずして